

染色は化学

―黄八丈の染師―



檜立で染屋を営む西條染め物店。八丈島の伝統工芸品・本場黄八丈の染色技術を受け継ぎ、技を磨きながら次の世代へ伝承する。
今回、西條染め物店の西條吉広さんと、お孫さんの氏平大樹さんにお話を伺った。

作業場を訪れると、湯気の立ち上る釜に囲まれて、染めの行程を紹介してくれた。吉広さんが説明している横では、大樹さんが黙々と生糸を漬け込んでいた。



(吉広さん) 黄八丈は黄、樺、黒の3色が基本の色。今は黒が人で、9割は黒。黒が一番漬ける回数が多い。竿でつけるやり方は15回くらい、たらいで漬け込むやり方は40回くらい。一番大変なのが一番人気なんだよ。

代々の染屋の長男だった吉広さんは、自然と仕事を継いだ。染めの仕事に携わってからは50年以上が経つ。吉広さんは国の伝統工芸士にも認定されている。

(吉広さん) 自分は3代目で、息子が4代目、孫の大樹は5代目。

染屋は水を大量に使う仕事で、水が豊かではなかった江戸時代の檜立には染屋はなかったんだよ。昭和になってからだね。水が使えるようになってから、当時の檜立村の村長がね、檜立には主要な産業がないからって立ち上げて、わたしのおじいちゃんが染屋を始めた。それが黄八丈の今につながるからね。

今はうちだけだけど、昔は染屋さんがほかにもあった。昭和の30年代か40年代くらいには織り子さんも120人くらいいた。

八丈島の伝統を支える染屋に入った大樹さんは、島の外で育った。染めの仕事を始めて2年。日々の仕事が楽しいと、目を輝かせる。

(大樹さん) 僕は兵庫県出身で、大学を卒業してから色々な仕事をしていました。ただ、うまくいかずどうしようかなと思っているときに、ちょうど家族旅行でおじいちゃんとおばあちゃんが関西の方まで来てくれて、「一回島来て手伝ってみーひん？」って声をかけてくれて、一回行ってみようかって。で、携わってみたら、大自然相手に木を伐りに行ったりとか、そういう仕事が多くて、それに魅了されたって感じです。



それまでチェーンソーや草刈り機は持ったこともなかったですけど、これは面白い仕事だなと思いました。やりたくてもできない職業だと思います。それをひしひし感じながら、恵まれた環境にいるなと思いがらやっています。

今は、始めてから2年くらいたちました。2年たって、まだまだ新しい発見があって楽しいです。これまでは染めしかしていなかったんですけど、最近は織る方も始めました。今はまだ練習中だけど、織りも楽しいです。

染めに必要な知識も、大樹さんは着実に吸収している。

(大樹さん) 木の皮をはぐのも夏場と冬場で全然違う。今の時期はようやくやりやすくなりました。おじいちゃんは簡単にやっているけど、命がけの作業で、木を倒す方向なんかも気を付けないといけない。おじいちゃんはやっぱり足腰強いなと思います。

八丈島の染屋の仕事は、染めるだけではない。かかる時間も、染める仕事より農作業の方が長いという。純粋な草木染めだからこそその苦勞がそこにはある。

(吉広さん) 農作業もやってる。カリヤス[※]って草は4月頃に植えて、10月頃に刈り取る。シイの樹皮40kgを採る作業はほぼ毎日やる。林業と農業、こっちの方が中心。染める作業は数時間で終わっちゃうけど、農作業と林業は半日かかる。

八丈の草木染は純粋な草木染め。八丈では、染屋が原料を全部自分で、栽培し、採集し、染色する。力仕事だよ。

※カリヤスは黄八丈の黄色を出す為の植物。コブナグサのことを、八丈島ではカリヤスと呼んでいる。



しかし、純粋な草木染であること、そこそが黄八丈の魅力なのだと吉広さんは語る。

(吉広さん) 黄八丈の染色っていうのは、八丈でできない草木染めなんだよね。原料の木を育てたり、伐りに行ったり、そういうところから全部やっているのは八丈だけってことね。その原料で、何回も根気よく染め重ねていくんだよ。そうしてできた糸は、今では間屋さんでも引っ張りだこ。

でも昔は売れなくて、京都まで行って「買ってください」なんて時期もあったのよ。それを考えるとありがたいですよ。

道具の進歩、技術の進歩。現代の黄八丈は伝統を受け継ぎつつもその品質は向上している。

編集後記

伝統を受け継ぎ、未来に繋げる八丈島の染屋。昭和に時代の流れに乗って始まった染屋は、今では本場黄八丈に不可欠な存在になっている。そして、道具、素材、方法、あらゆる面からの改良は、本場黄八丈の糸をよりよいものへと進化させてきた。

そして今、八丈島の染屋では新たな担い手が育っている。八丈島という環境でしかできない黄八丈が次の時代にどのような進化を見せてくれるか、楽しみだ。



(吉広さん) 染料を煮出すザルは、昔は竹で編んでたから、ひと月も持たなかった。しかも目が粗いから木クズも出る。それが糸についてなかなか落ちなかった。今のステンレスのものは何十年ももってる。目が細かいから大きなごみが出なくなった。これは浅草で見つけて買ってきた。

釜も、昔は直接火を当てた。それを昭和の時に薪のボイラーにして、3年前にこのガスのボイラーに変えた。昔は2時間くらいどンドン燃やさない、蒸気がたたなかった。今は5分くらいで蒸気が出るよ。

(大樹さん) 昔は煙がもくもくで危なくて、子供の時は作業を見せてもらえなかったです。

(吉広さん) 改良はずーっとしてる。発色作業というのがある。何を使うのがいいのかってのを見つけてる。樺と樺はアルミニウムって金属が入ってるんだよ。それが黄色を綺麗に発色させるんだ。

樺色は雑木の石灰を使う。昔からそういわれている。泥は鉄分が入っている。ただ、それは糸を傷めやすい。染めは化学だからね。

糸も、昭和の初めころまでは八丈で糸を作ってたけど、八丈の糸は技術が未熟だった。座繰りでやるんだけど、細い太いが均一じゃなかった。今は綺麗な糸を使ってるんで商品になってるけど、昔はきちんとした黄八丈にはなりきれなかった。

今は、糸もいいし染めの技術もよくなった。

3代目と5代目は糸を染めるやりがいと将来についても語ってくれた。

(吉広さん) やりがいを感じるのは、東京なんか行った時に、染めたのを着てくださってる方がいるとき。見た瞬間にすごく感動するね。

(大樹さん) 発信もしていきたいです。外国の観光客の方とか、様子をうかがっている方もいるので、見ていただけるようにもしたいですね。